

NCUP
第2回 日能研文学コンクール
入選おめでとうございます

【特別賞】

『忘却の系譜』 浅見佳織さん（東洋英和女学院 高2）

作品に対する思い・感想

記憶に関する事は常日頃より小さな一つのテーマとして考えていて、その考えの一部を形にした作品が受賞させていただくという形で評価を得られたのは、共感であろうと否定であろうと自分の考えが人に伝える事ができて、それに評価をいただけた様にも思え、嬉しく思っています。
ありがとうございました。

この矮小な物語に耳を傾けてくれる貴方へ。
もし貴方が人という生き物であれば、こう
している間にも貴方の記憶には新しい「今こ
の時」という瞬間が刻み込まれていることだ
ろう。そして古い「過去」という瞬間が消え
失せていく。一瞬前の貴方とすら全く同じ記
憶を保ち続ける事は出来ないだろう。まして
や、幾歳も以前の貴方の記憶と同一のものな
ど、持ち続け得る筈も無い。それは逃れよう
の無い事実であり、人は得てしてその様にし
て生きてゆくものである。

それが例え、どれ程愛しい記憶だとしても。

新しい瞬間を刻む度に、霧に吞まれ、薄れ、
やがて、塵芥の如く消え失せるのだ。

その変えようの無い事実を受け入れぬ人間
がどうなるのかを語ろう。それがこの物語。

異国の薫りのする衣装を身に纏った語部が、

言う。唄うように。

話をしようか。つまらない話を。

或る、不様で哀しい人間の話を。

突然飛来した覚醒。

先ず見えたのは、私の瞼の裏側。

私は眼を開けた。

私の眼は厚く冷ややかな石の壁を見た。

私は両の脚を投げ出し、座っていた。

私の下にはやはり冷たい石の床。

私の背にも壁が寄り添っていた。

私は当然の様にここに居た。

私は気が付いたらここに在った。

私はこの場所を知らないのに。

ここは何処だ。

私は……

お決まりの文句の様に、「私は誰だ」と続ける事はなかった。それで、人が持っていて当り前というレベルの自分についての知識が、正常な人間と同じ様に私の頭の中にも存在する事に気付いた。私はその事に深く疑問を抱いた。平素、人は自分が自分の事を良く知っていたように訝しむ事は無い。しかし私は今現在、異常、だった。否、私がと言うよりは、私が居るこの空間が、私が居るのには異常である、と言うべきか。

私自身はおよそ不自然な程正常だった。だがここは、この牢獄の様な空間は、咎人でもない筈の私には不釣合いであった。その矛盾、エラーを抱えた私という個を正常な人間と断定する事は不可能であり、つまり私は異常なのだと言えた。だから私は疑問を生じさせた。私の脳に。

私は、何故私のことを識っている？

私は「異常」なのに。何故自分がここに居るのかも、ここが何処なのかも識らないのに。

私の名前。性別。年齢。出自。経歴。家族。友人。何時どんな時に私がどんな感情を抱いたか、誰の言葉にどんな反応を返したか。全てすっかり覚えていた。人生の中で見てきた物を、記憶素子を再生する様に脳裏に浮かばせる事も可能だった。

現在の自分の事だけが、判らなかつた。つまり、私が何故こんな所に居るかが。存在する中で最後の記憶は、父と思しき人の哀しげな微笑と、瞳に滲んだ僅かな狂気。次瞬には、唯々とした闇。そして私はこの「牢獄」に居た。しかし意識を失っている間にここに入れられ目覚めた、という訳でも無さそうだった。何故なら、私が気付いた瞬間に両の瞼を開いた記憶も、この冷たい石の床から身を起こした記憶も無い。突然にこの世界が現実として眼前に突きつけられたのだ。気付いた瞬間は、思考を始めた瞬間、だった。

取敢えず、何らかのきっかけで何故自分がここに居るか思い出すかもしれないと、眼だ

けを動かしてぼんやりと辺りを見回した。冷たく無慈悲な牢獄。石の壁と石の床。頭上高くに一つだけ有る小さな窓から差込む光は薄く柔らかく、円い形に切り取られた空の色から、その光が月のもつと知れた。それが冷たい石を照らす様は何処か優しく美しかったが、既視観の欠片も見出す事は出来なかった。

ここは何処だ。何故私はこんな所に居る？ 私は何時間も悩み続けた。必死に思い出そうとした。しかし、何を思い出せば良いのかも解らないのに、いくら考えても答えは出る筈も無かった。私は苦しんだ。何故、こんな単純な事が解らない。他の自分の事は何でも解るというのに。否、逆に、何故私はこんなにも鮮明に自分の事は識っているのだ。現在の自分の所在すらも判らない私が。そうこうしている内に、私に頭には次第に違う考えが浮かび上がってきた。むしろ、あたかも元から持っていたかのように思わせて、その実こちらの「自分についての記憶」こそが

後付された贗物で、私が抱えた「異常」なのではないのか。私という個はこの牢獄で思考を始めたあの瞬間から形成された物なのではないか。

そうだとすれば、この場所はいわば私の故郷で、私がここに居る事はなんら「異常」ではない。何一つ矛盾は無い。それに何より、楽だった。自分の事についてあれこれと悩む必要も無い。私は今始まったばかりなのだから、悩むのはもつとずっと後の自分に任せれば良い。ならば、いつそ私を悩ませたこの偽りの記憶は忘れてしまおうか。「異常」なぞ取り除いてしまいうに越した事は無い。

その方が楽、なのだ。訳の解らない現実を、鵜呑みにして無駄に考え苦しみ続けるよりも、自分に都合の良い虚構を信じる事で、現実の残酷さに耐えられない弱い人間は己を守るのではないか。そうだ、忘れてしまおう。そうして私は、楽で優しい一見矛盾の無い考え方に身を任せて、嘘と定義付けた記憶を消し去

り、都合の良い存在に成る事を決めた。眠ろう。ずるりと背が壁を擦り、上身が倒れて行くのを何処か遠い場所での出来事のように感じながら、とろりとした物の中に沈む様に緩やかに、だが確実に眠りの世界へと堕ちて行つた。今はただ、眠ってしまおう。きつと次に起きた時には、無駄で無意味な記憶は消え失せ、私は矛盾の無い存在と成っているだろうから。

その時、頭の片隅で、小さな小さな火花が弾けた。無駄で、無意味。本当に？瞬間、私の脳裏に様々な光景が浮かんだ。懐かしい景色、出会いや別離、歓喜と苦悩、大切な存在、嫌悪する存在、そして、愛しい笑顔、それは。無駄で、無意味な、物だったろうか。

否定。

違う、駄目だ！突然私は弾かれた様に我に返った。違う、決して、この記憶は決してそんな物では無い！纏わりつく暴力的なまでの眠気と抗いがたい力を振り払い眼を見開くと、

思考している間まばたきを忘れていたらしく酷く痛んだ。渴き切った眼球を潤ませる様に自然と涙が覆った。何を考えているのだ、私は。未だ違和感の残る眼を擦ると、指が冷え切って上手く動かせない程である事に気付いた。やはり思考していた間指先一つ動かさずに居たからだろう。指どころか体中が、ぎしりと軋む音が聴こえた。このままでは石になってしまいそうだ。よろよると冷たい壁に手を付き立ち上がる。

ぎこちなくも暫く体を軽く動かし、滑らかに動かせる様になると、頭も冷静さを取り戻してきたのを感じた。それに伴い徐々に恐怖が私の感覚を支配した。先程までの自身の思考に戦慄し、鳥肌が立った。何故あの様な事を。何故忘れようなどと思った。今ならばあの記憶が後付された贗物などではなく、愛おしむべき大切な物で、私という人間の歩いてきた道であり証なのだと解った。そうだ、私は間違いなく私の識っている通りの存在。

この暗く冷たい場所から始まった者などでは、断じて無い。今や完全に頭は覚醒していた。

人は弱い。時に現実には耐えられず、夢想へと逃げ込む事を選ぶ。時としてその選択は正しくも有る。だが私は、私の生きてきた長く短い道を忘れたくは無い。例え、その記憶にしがみ付く事で、思い出したくも無かった事を思い出し、傷付いても。記憶の愛しさを思い出した私には、最早忘れ去る事など出来なかった。自然、私は確認する様に自身の記憶を辿り始めていた。

私は生まれも育ちも凡庸そのものだった。兄弟は無く、両親は優しく、また深く愛し合っていた。解り合える友が有った。特別秀でるものが無くとも、私は幸せな人間だった。

更に記憶を溯る。幼少期、私は人の内面について考えるのが好きな子供だった。それは父譲りのものだった様だ。しかしいつしかその考えは他人全てへの疑いに変わり、内心では全員が私の事を疎んでいるのではと訝り、

拒絶されるのが恐ろしく、いつも独りで居た。そんな私を母は心配したが、私は平気だった。何故なら一人だけ、信じられる人が居たから。私に似た人。彼女も独りだった。私と同じく静かな場所で考え事をするのが好きで、気が付けば傍に居た。どちらからともなく話しかけ、打ち解け、親友となった。そして私達は互いに気付かされた。独りである事の愚かさ。人と関わる事を避けていては、自分を駄目にするだけなのだ。どちらからともなく私達は決めた。他人と交わる事を。

無論、今までずっとこちらから関わるのを避けておいてそう簡単に受け入れられる筈も無く、幾度も傷付き傷付けたが、いつしか打ち解けて行った。信じられた。友と思える事を思い上がりや自惚れだと感じる事も無くなった。私も彼女も、友を得た。それでも彼女とは、一番の親友だった。幸せだった。私は愛しく思った。彼女を、他の友達を、皆と過ごした暖かく、輝いた時を。

私は、人を信じる事が出来ていた。母はそれをとても喜んだ。そして父は、大丈夫だと思っていたと、後に優しく笑っていた。お前は私に似ているから、彼女という心許せる存在が一人居れば、私と同じく人を受け入れられる様に成るだろうと思っていた、と。父にとって母は、私にとっての彼女の様な存在であつたらしい。尤も母は彼女よりもずっと気が強く、もっと強引に父を他人と交わらせたいらしいが。他人と解り合える様になつて、両親とも深く打ち解けられる様になつて、両親は家族の尊さを知つた。

そんな頃、母を亡くした。やつと本当の生き方を見つけられ、幸せの最中にあつた私を叩き落す出来事だつた。私は幾日も幾日も一人で泣いた。その所為で最初気付けなかつた。父の絶望と、狂気の始まりに。

父にとって母は、人としての生き方を教えてくれた、何よりも大切な存在であつたらしい。父の悲哀は私よりも深く、見る見る内に

優しい父の精神は病んでいった。濃い黒だった髪の色は総て白く抜け落ち、目に見えて憔悴し痩せ衰えていった。話しかけてもまともな答えは返って来ず、一人ぶつぶつと何事かを呟くのみだった。人は父を狂人と呼んだ。だがある日父は突然、戻った。髪は再び漆黒の色を取り戻し、穏やかに笑う様になった。ちやうど母が死ぬ前の父に、戻ったかの様にかつたが、日に日に衰弱する父をしかしどうする事も出来ない私自身への憤りの方が、大きくなっていたからである。

しかし父は、数ヶ月程の一定期間が過ぎると狂った様に絶望した。ちやうど母が死んだ時と同じ様に。更に一定期間が過ぎれば、元の優しい穏やかな父に戻った。しかも父は何年経ってもそのままの姿だった。私は成長していったが、父は老いる事が無かったのだ。疑問に思つて父に訊いても、むしろ私が可笑しな事を言っている様な目で私を見、一笑に

付すのみだった。それ以上追及するのは何故か酷く恐ろしい事のように感じ、父は歳をとつてもそれが外見に表れ難い人なのだと、無理に自分を納得させた。何年か経つと、絶望する周期が終わりに近づくと、深く考え込む姿を見る様になった。その時の父は、自分を責めている様に見えた。

ある日。冬の日だった。その日の父は、いつもと様子が違った。もう直ぐまた穏やかな父に戻る頃合いだと、慣れて何処か醒めた頭で考えていると、突然父は私に問うた。

お前は、今の幸せな時を手放せるかい？

私は不思議に思いながらも考え、答えた。

いいえ、出来得る事なら、このままでもいいと思ってしまう。変わりたくない。

私の答えを聞いた父は、僅かに哀しそうに笑った。それが私の最後の記憶。

記憶を辿り終えた私は思った。私のたったこれだけの短い人生の間でさえ、人はなんと

変わって行くのだろうと。

人という生き物である限り、こうしている間にも私の記憶には新しい「今この時」という瞬間が刻み込まれている。そして古い「過去」という瞬間が消え失せていく。一瞬前の私とすら全く同じ記憶を保ち続ける事は出来ないだろう。ましてや、幾歳も以前の私の記憶と同一のものなど、持ち続け得る筈も無い。それは逃れようの無い事実であり、人は得てしてそのようにして生きてゆくものである。

その時ふと、気付いた。これからは私は、その変化をこの牢獄の中でしてゆくのだという事に。私を閉じ込めるこの牢は堅固で、とても出られそうにも無いのだ。

そう思ってから私は、じりじりと恐怖に支配されていった。ならば私は、この冷たい牢の中で精神を蝕まれ一人変わって行くのか。現に目覚めてからこれまでの時間だけでも、私は変化していた。身体的にも、精神的にももう、ここに入る前までの「私」とは明らかに

違う。あの頃と違う。あの輝いていた愛しい時間には、戻れない。何故なら私が「違う」から。彼女たちは、私の愛しい者達は、同じ世界で同じ時を過ごし、多少の差異は有ろうと共に老いて行く。私一人を残して。私一人がこの牢獄の中で老いて行く。例え死ぬ前に出られたとしても、以前の私と完璧に同じではられない。

気付くと私は狂人の様に厚い石壁を叩いていた。だが堅い石壁はびくともせず、私の手の方がぼろぼろになった。一番崩れかけていて脆そうに見える箇所を叩いても、同じだった。無情な壁が紅く彩られる。

嫌だ、変わりたく無い。忘れたくない。私は細胞全てで、変化を拒否した。脳細胞すらも含めて。そうだ、変わりたくなければ、忘れなければ良いのだ。そして無駄な部分の記憶を切り落せば良いのだ。ここに入って、目覚めた瞬間から今の今までの記憶、私の思考を。「変わりたくない」時間の中に居た私よ

り後の私の記憶を消去しよう。そうすれば、あの頃と同じ私で居られる。

忘れよう。変わりたくない。変わりたくない。変わりたくない。変わりたくない。変わりたくない。あの子のままに居たい。変わりたい。あの子のままに居たい。変わりたい。あの子のままに居たい。変わりたい。

そうして私は、意識を手放した。

私は眼を開けた。

私の眼は厚く冷ややかな石の壁を見た。

私は両の脚を投げ出し、座っていた。

私の下にはやはり冷たい石の床。

私の背にも壁が寄り添っていた。

私は当然の様にここに居た。

私は気が付いたらここに在った。

私はこの場所を知らないのに。

ここは何処だ。

私は・・・

目覚めると突然、私は冷たい牢獄に居た。

この、見た事も無い場所に。この場所が何処なのかも解らない私は、だが不思議な事に、私自身の事は充分に知っていた。ここが何処なのか、何故ここに居るのかだけが解らない。

ふと眼を上げると、一箇所だけ石壁が崩れかけているのに気が付いた。私にはそれが綻びに見えた。何故そう思ったのかは釈然としないが、この無慈悲な牢獄が強い狂気を受けないで、止め続けて出来た綻びに見えたのだ。あの綻びから外に出られるかもしれない。そう思った瞬間、異常なまでの歓喜が私の体に満ちた。体が打ち震えた。その理由も解らぬまま、歓喜に任せて這いずる様にそれに向かい、力尽きて倒れ掛かると、強固に見えた石壁は呆気

無く崩れた。

そこは確かに、外の世界だった。

だが、私はその場所に見覚えが全く無かった。人気は無い。妙に寂れた世界。ここは、何処だ。声には出さず再び呟く。崩れた石壁の直ぐ外には、見渡す限りの砂原が広がっていた。風が吹くたびに無数の砂粒が大気に舞い踊った。所々に瓦礫が埋まっていた。

暫く呆然とした後、何とはなしに振り向き、最前まで閉じ込められていた牢獄を見た瞬間、明滅する光と共に全ての記憶が津波の様に突如押し寄せた。

私が願った事。それは不変。思い出したのは、私が全細胞で変化を拒否した事。私は恐怖した。記憶を消した事にでも、傷すらも消えている事にでも無い。私が変化を拒否したのが、一度や二度ではないという事。慄く頭で数えるが、正確な回数すら解らないのだ！そして何より恐ろしいのは、決して短くない時が過ぎたにも関わらず、私の体が全く変わ

らず若々しいままだという事だった。

数え切れぬ程、何度も。私は願い、拒否したのだ。そしてその願いは、その都度叶えられていたのだ。また、忘却したのと同じ回数、錯乱した私の拳を受けた分厚い石壁が、そこだけ酷く脆く成る程の年月が経っているという事だ。恐怖に震える指で触れた私の頬の肌の感触は、酷く汚れて荒れては居たものの、瑞々しく、皺も刻まれていなかった。そして手には、激しく打ち据えた様な傷は一つとして無かった。

私は理解した。してしまった。ならばこの世界はあの頃とは何もかもが違い、私の愛する人達は、もう何処にも居ない、と。私は、独りなのだ。

絶望。

砂舞う世界に響く、愚者の、絶望に満ちた叫び。そうして私は砂に埋もれて、やがてその叫びさえも暗い空に吸い込まれて、消えた。

人は弱い。時に現実に耐えられず、夢想へと逃げ込む事を選ぶ。時としてその選択は正しくも有る。だが、人は常に変化し続けて生きて行くものである。大切なものを失うのが恐くても、変化を受け入れず、現実から目を逸らして生きて行くことは、出来ないのだ。してはいけないのだ。そうする事によって、知らない内に失うものが在るのかもしれないのだから。この、無様で哀れな人間の物語の様に。

話し終えた語部は、何処か遠くを見ていた。じつと大人しく聴いていた子供達は不思議そうに語部を眺めていたが、話が終わったのを見て取ると、楽しい事を思い出した様に立ち上がり、それきり異国の語部の事は忘れ、笑いながら走り去った。一人、黒髪の孤児の少女を残して。身を押し潰す様な沈黙が降りる。語部は道に座ったまま、目を伏せて己の痩せ

た手を見ていた。そんな様子を見て、少女が口を開いた。何かに縋り付くかの様に、必死に問い掛ける。

それは、貴方自身のお話ですか？

その問いに語部はちいさく唇を震わせた。少女の大きい理知的な光を宿した瞳を見る。そして絞り出す様に囁いた。そんな訳無いでしょう、と。

だってこれは、ずっと昔のお話なのですよ。

そう言って、傷跡も無い細い手で少女の柔らかな黒髪を撫ぜ、優しい微笑を向けた。

そう、私は選ばなかった。時を戻したいと願った様に、然るべき姿に成りたいとは願わなかった。願えなかった。

何故なら解っていたから。きつとまだ父が何処かで生きていると。あの頃と全く変わらぬ姿のまま、私を待っていると。だから私も、全く変わらぬ姿のまま父に会いに行かねばな

らぬのだ。

父はきつと、母の死を受け入れられなかったのだ。そして思った。母が死んで、彼女の時間が止まったのに自分は変わり続けていて、母と過ごした幸せな頃の自分とはあまりに違うと。父は、母のいた頃の記憶を忘れてしまいう事を恐れ、母が居た頃の自分からの変化を拒んだ。そして「忘却」したのだ。母が死んでからの記憶を。肉体の記憶も、精神の記憶も。私と同じ様に。だがある日、父は気付いたのだろう。如何に残酷で切ない現実であろうと、如何に受け入れ難い事実であろうと、拒む事を扨んではいけないのだと。しかし時既に遅く、父の全細胞は「忘却」を何度もする内に、習慣的に一定の周期で繰り返す様になっていたのだろう。父の意思とは無関係に。

それでももちろんその間、歳を重ねる事は無い。つまり父は凶らずも、不完全ながら不老不死を手にしてしまったのだろう。しかしそれは父が望んでの事では無かった筈だ。父の

幸福は私や母と過ごす事。小さくて、優しい物だった。独裁者達が己が繁栄のみを願い渴望してきたと同じ様に、父が望む筈が無い。私にはそれが判った。今、同じく不完全な不老不死を心ならずも手に入れた私には。私の体の全細胞も一定期間、つまり、牢の中で目覚めてから忘却に到るまでの時間と同じだけ時が過ぎると、習慣的に「忘却」しようとするのだ。だから、判った。父が未だ、あの頃と同じ姿で生きていると。

父は苦しんだだろう。後悔したであろう。己の過ちに気付いても、強制的に「忘却」してしまうのだ。そもそも、変わりたくないという強烈な願いから忘れる事に成功したのだから強く望めばその逆、つまり忘れないでいる事も出来たかもしれない。但し、恐らく父は気付くのが遅過ぎたのだ。現に、私は何度と無く「忘却」を食い止めていた。それは、父が生きていると判ったから。父が私をあの牢獄に入れ、私を自分と同じ状況にする事で、

私に理解させ、助けを求めているのだと感じたから。つまり、殺して欲しいと。だから、変わる事を拒む事を拒み、忘れたくないと強く願った。やはり時折食い止め切れず忘れる事も有ったが、その度にまた父を救うという考えに達する。そうして、見た目だけでなく細胞自体の年齢も変わらずに、あの頃のまま、若い姿のまま、父を捜し続けた。殺す為に。

その気の遠くなる様な長い旅の間、時にも住まぬ地に行く事も有ったが、町や村を行う時は、擦り切れた服の裾を払い道に腰掛け話をした。大人に成りたくない、このままでもいい、と願う無邪気な子供達に。だがそれは、変化を受け入れぬ事の恐ろしさを説くだけが目的では無かった。思えばその頃、既に私の心は病み始めていたのかもしれない。あどけない子供達に残酷な現実の一例を突き付ける事に、微かな喜悦を覚えていた。だが、幼く真直ぐで、純粋な子供達には私の暗い幽かな狂気は届かなかった。それに私は安堵し

ていた。そんな己の矛盾が愚かしくて、自嘲しながら。また、そうする事で探していたのかも知れない。私に良く似た子供を。

とは言え、語部をしながら当ても無く町を渡り歩いていた訳ではなく、私には父の所在に心当たりが有った。父はきつと、あの家で待っている。母の幻想を抱きながら、時折最悪な現実打ちのめされながら。私に由る、慈悲の死を待っている。何十年と経過している為、自分の現在居る処からして判らなかつた為に長い旅になったのだ。「あの頃」と比べあまりに様変わりしているのを感じる度、あの牢で過ごした時の長さを思い、私は晒った。

そして終に辿り着いた。激しく老朽化していても、あの頃の面影をそのままに残した、私の家に。戸の前に立つと、家の中に人の気配を感じ、全身が緊張し動けなくなる。恐い。この戸を開けるのが。けれど、終わらせなければ。父の苦しみを。私はその場に止まりた

がる脚を無視して、無理やり一步を踏み出した。戸を思い切り開け放つ。

ああ、おかえり。

私は思わず戸口で再び固まった。そんな私には構わず優しい声が続ける。

心配したんだよ、お前もお母さんも居ないものだから。お母さんは未だ帰って来ないね。折角お前の誕生日なんだから、今日は沢山お祝いしようね。

ただいま、とは言えなかった。母は帰って来ない事も、私の誕生日が母の命日である事も、父の心底から幸せそうな柔らかい笑みに向かつては、言えなかった。言い尽くせぬ感情が去来した。あの日から少しも変わらない親子の姿が、そこに有った。そしてそれを終わらせる為に、私は今まで生きてきたのだ。この姿のまままで。

けれど、許されないだろうか。あと少しだけ、このまま、家族として過ごしたら。私は震える指を父に伸ばした。父は当たり前のように

うにその手を取って、笑顔に向けた。ああ、どうか、もう少しだけ貴方の苦しみを長引かせてしまいうけれど、最後の一日を過ごす事を、許してください。私は父と、神にはではない、もっと確かな自分の中の何かに、願った。

ごとりと音を立て、私の手から父の体が落ちた。テーブルの上には、何十年ぶりかの父の料理が並べられていた。私の、とつくに過ぎた年齢の誕生日を祝う為の料理が。その中の一つに、私は深く眠る薬を入れた。ずっと昔から決めていた殺害の手順。少しでも苦しませぬ様に、けれど最後は、私のこの手で。

目の前に転がっているのは父の死体。見るも無残な、ではなく、安らかで幸福の中に居る様な。母が未だ生きていると無条件に信じたまま、穏やかに眠ったまま。最後の記憶は、愛しい我が子との一日。その死に顔に笑顔が浮かんでいたとしても何ら不思議は無い、優しい死だった。

だが私には解っていた。うつ伏せに倒れて見る事の出来ない彼の、涙が。解放への喜びや、様々な悲しみで流れた涙。そして、私も同じ涙を、流していた。父を救えた事を喜んで、束の間の幸福でしかなかった一日を想って、そして自分の孤独を嘆いて。様々な感情が、数え切れぬ程の想いが押し寄せて、私は父の亡骸の傍らに、崩れ落ちる様に倒れた。立っていられない。私は、あまりに空虚で。

独りになった私は、また急速に、忘却の波が押し寄せるのを感じた。忘れる周期が来たのだ。私は強い意志で拒もうとして、ふと思った。何の意味が有るのだろうか。私を待つ父ももういない。何処を捜そうとも私の愛する人達は居らず、私はこの世界で、完全に独りきりなのだから。

ここまでが、この物語。ここで、私の下らない物語は終わる。何故なら、私はもう新し

い物語を語る事は出来ないから。これからは、ただ繰り返すのみ。

私は、父を殺した報いに、この先永遠に苦しみながら生きて行こうかと思った。けれど、出来なかった。愚かで矮小な私には、永劫に続く苦しみが恐ろしかった。耐えられなかった。結局私は、父と同じく過ちを犯した。ただ自分の為だけに、他人を巻き込んだ。私が歩いてきた苦しい旅路を辿らせようとしていたのだ。私は、この忘却の系譜を断ち切れなかったのだ。もしかしたら更に続くかもしれない。変化を拒む者が居る限り、いつまでも。そして私も終に、忘れる事を拒めなくなる。父の様に。私は待っている。父と同じく、この家で。私に扱われてしまった、私が引き取り私がこの家で育てた、私に良く似た孤児の細い指が、私の歪んだ永遠を壊しに来るのを。

ここから先の物語は、私に良く似たもう一人の語部による、もう一つの、良く似た物語。

突然飛来した覚醒。

まず見えたのは、わたしの瞼の裏側。

わたしは眼を開けた。

わたしの眼は厚く冷ややかな石の壁を見た。

わたしは両の脚を投げ出し、座っていた。

わたしの下にはやはり冷たい石の床。

わたしの背にも壁が寄り添っていた。

わたしは当然の様にここに居た。

わたしは気が付いたらここに在った。

わたしはこの場所を知らないのに。

ここは何処だ。

わたしは……

最後の記憶は優しく髪を撫でた旅の語部の、
哀しげな微笑と、僅かに瞳に滲んだ、狂気。